



TITLE:

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植生(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

小見山, 章; 和田, 一雄

CITATION:

小見山, 章 ...[et al]. 志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植生(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1983, 13: 42-42

ISSUE DATE:

1983-10-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163221>

RIGHT:

域に分布し、そこでは5月中旬から新芽が伸びだしてきた。1500 mでは6月の初め、2000 mでは6月中旬、2300 mの山頂付近では6月下旬に伸びだしてきた。ササの新稈は急速に伸び、約30日で成葉となったが、太い稈ほど伸長成長は長びいた。コシアブラは800 mから1700 m付近まで分布していた。芽ぶきは他の落葉樹と較べて遅く、黄葉も早かった。そのため生育期間は短かいが材は軽く、みかけの成長量は大きい。本地域のサクラ類は、オオヤマザクラ、タカネザクラ、カスミザクラ、シウリザクラ、ウワミズザクラと移植されたソメイヨシノの6種類である。オオヤマザクラの1200 mでの花期は5月上旬、結実には6月中旬、タカネザクラの1500 mでの花期は5月中旬、実は7月上旬、ウワミズザクラの1500 mでの花期は5月下旬、実は8月中旬であった。これら以外のサクラ類は量的に少なく、サルのごちそうとして主要ではないと考えられる。

1982年の4月から10月までの生育期間における気温は平年に比べて、前半の5月が暖かく、7、8月に低かった。1600 mでの雪解け（積雪計が0の日）は5月3日で平年並であった。しかし、本年は5月23日と6月15日に晩霜があり、それぞれ芽ぶき中であったブナやヤマドリゼンマイが被害をうけた。8月1日には強風台風の10号がこの地域をおそい、コメツガ、ブナ、シラカンバなどの高木が多数風倒した。ブナについては本地域での現在量の約0.97%が失われたものと推定された。

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植生

小見山章（岐阜大・農）
和田一雄（京大・霊研）

ニホンザルのすみ場所である森林の植物体量の年次変動および季節的変動を明らかにして、ニホンザルの行動様式との関連を究明しようとしている。

本年度も過去4年間にひきつづいて、種子落下量および落葉枝量をリタトラップ法によって、解析中である。

調査開始年（1977）および本年度は、とくに秋期における果実量が豊かであった。これ以外の年度では、その逆で、なかには果実がはなはだしく

凶作の年度もあって、年次変動が顕著な差をもつことがわかった。

季節的には10月の果実量がもっとも豊かであることがわかった。

しかし、樹種毎に果実量の年次・季節変動のパターンが異っており、ある樹種が凶作の時に、他樹種が豊作であることが生じている。また、場所的に、豊凶の差が著しいものもみられた。

志賀高原に生息するニホンザルの糞による食性分析

斉藤良裕

昭和56年度に引き続き、糞分析を行なった。

1980年、3月17日に採集した糞の中の1つを細かく仕分けをして内容物の量を調べた。

糞を5 mmと0.5 mmのフルイにかけて、大、中、小の3つのグループに分け、大と中について、肉眼と実体顕微鏡で仕分けを行なった。

大は、全体の30.5%、中は47.5%、小は22%であった。大の仕分けは、ササが65.8%、木の繊維9.6%、冬芽4.3%、不明10.3%に分けられた。仕分けした木の繊維の中から、大きな繊維24本と小さい繊維239本中34本についてと、不明なものの中の3ヶ、計60本についてエポキシ樹脂包埋を行ない、マイクロームで切片を作った。そして位相差顕微鏡で観察と写真撮影を行ない、繊維の断面組織の比較を行なった。

課題 3

西部海岸地域を対象とするヤクシマザルの生態的研究

上原重男（札幌大・教養）
丸橋珠樹（京大・霊研）

上原は1983年3月に、①西部林道（標高100～170 m：N=29）、②浜之上林道（320～700 m：N=24）、③岳之川～国割岳（600～780 m：N=4）、④永田歩道（240～470 m：N=6）、⑤大川井道（200～900 m：N=48）で集めた糞を分析した（採集：上原、丸橋、好広、甲山、大井）。詳細は未検討だが、明らかになった点を述べる。

すべてに共通して多く含まれていたのは、常緑